

古仏語複文の二文型について

太 古 隆 治

古仏語には、従属節が主節に先行する場合、その従属節と主節の結びつき方に二通りの型が存在することが知られている。その一つは、従属節が主節の語順になんら影響を及ぼさない型で、現代フランス語の複文構造に通じるものであり、また他方は従属節が主節の語順を規定し、主節に倒置を起こさせる型で、現代フランス語からは消滅しているがドイツ文法であまねく採られている方法である。

フランス語史の一時期すなわち古仏語期においてこのような二種類の複文構造が並立していたということは興味深い現象と言うべきであり、この二文型の発生時期やその原因、二つの使い分け原則などについて関心が持たれるところである。本稿は、古仏語テキストに親しむ中で折々目に止まり取り集められたものに基づく一報告に過ぎず、今後首尾一貫した研究が待たれるが、少なくとも、古仏語文法のマニュアルが看過している点を幾つか加えるとともに、校訂本のここかしこに批判的読みの余地が残されていることを示唆できよう。

* * * * *

古仏語はその語順において現代語と比べようもない自由を享受している。しかし、こと動詞に関しては、これを文の第二位に置くことが早い時期から最も好まれ、13世紀初頭以降次々と現れる散文文学作品を目にする限り、遅くともこの時期あるいはさらに早い時期に動詞第二位が単なる好みではなく原則となっていることが伺える。

この動詞第二位の文の第一成分すなわち文頭には、主語は言うまでもなく（S・V・・・）、副詞や目的語等いかなる補語も来ることができる（C・V・・・）。ただし、補語が第一成分となると、主語を有する文の場合、その主語は必然的に動詞の後に来る（C・V・S）。いわゆる「倒置」と呼ばれる現象である。

従属節が主節の語順を規定し、主語に倒置を起こさせる型とは、厳密にはこの「C・V・S」の「C」の位置を何らかの補語節が占める複文を指すが、視野を広げれば、補語節のあと直ちに動詞が来る場合を考えればよいのであって、その動詞に続く成分が主語である必要はなく、別の補語でもよいし、そのまま動詞だけで終わることもありうる。この種の複文の所在については、L・フーレ¹⁾、さらにG・モアニェ²⁾とが、

◀ *ainz que, ainçois que (= avant que)* ▶ を挙げて記載している。そのうちモアニェは『アーサー王の死』を典拠として例を引いているが、この作品は古仏語「古典期」のほぼ中間期に位置する13世紀初頭の作品の一つで、しかも散文でもありごく自然な言語状態を観察できるので、本稿もこのテキスト³⁾ をモデルとして論を進めることにしたい。下の二つの例文はモアニェ自身も引用しているものである。以下に引用する例文では、主節の動詞部分⁴⁾ をイタリック体で示し、下に拙訳を付す。

Ex. 1) *Bt ainçois que vos reveingniez mes, serai ge touz gueriz.*
 (*La Mort le roi Artu*, 5, 15-7)
 [あなたがお帰る前に、私はすっかり良くなっているでしょう。]

Ex. 2) *Bt quant il furent tuit apareillié, messire Gauvains vint a son oste.*
 (*ibid.*, 30, 6-7)
 [彼らの支度がすっかり整うと、ゴーヴァン殿は主人のもとへやって来た。]

この二つの複文の構造を図式化すると次のA、Bようになる。

A. 「一文型」

ainçois que vos reveingniez mes, serai ge touz gueriz.
 S V C | | |
 ┌──────────┴──────────┐ ┌──┐ ┌──┐
 C ─────────────────── V ─ S

B. 「並列型」

quant il furent tuit apareillié, messire Gauvains vint a son oste.
 S — V — C | S — V — C

見ての通り、Aは小さな節をより大きな節が呑み込んだ、いわゆる「入れ子構造」をなしている。それに対してBにおいては、主節に対して従属節は言わば外部に身を置いた観を呈しており、文頭の◀ *quant* ▶ を取り除けば、独立した文が単純に併置された状態と見ることができる。統辞的に見て、Aは切れ目のない一直線の文だが、Bの主節の前には明確な休止があるという言い方ができる。そこで以後、便宜上、前者を「一文型」、後者を「並列型」と呼んで区別する。

◀ *quant* ▶ は「並列型」複文を導く代表的な従属接続詞である。例文2はその典型例だが、その主節は必ずしもこのような「S・V・C」とは限らない。特に古仏語で

は判りきった主語人称代名詞は省くことが多く、その場合、下の例文3のように副詞の« si »が文頭の穴埋めをするのがしばしば見られる。この« si »は本来« ainsi »ぐらいの意であるが、その意味は薄れ、先行する従属節の内容を軽く再喚起し、同時に主節の文頭を支える働きをしている。

Ex. 3) et quant il ot ce fait, si dist : (*ibid.*, 2, 12)
(そして彼はこれを実行したのち言った、)

また、主節の文頭を他の補語が占めることもある。

Ex. 4) Quant Boorz fu venuz a cort (...), assez trouva a court
qui grant joie li fist; (*ibid.*, 2, 1-4)
(ボオルトは宮廷に到着すると、彼に熱烈な歓迎を示してくれる
大勢の人を見出した、)

要するに、従属節に対して統辞的に一線を画する文 — ここでは動詞第二位の文 — が確認されれば、それは「並列型」複文である。

我々がよく知る従属接続詞ではさらに、« se (= si) »がこの「並列型」の範疇に入る。

Ex. 5) se il vos en poise, ce n'est pas merveille; (*ibid.*, 3, 32)⁹⁾
(そなたが心痛めるとしても、それは驚くにあたらない、)

また、« puis que (= après que, puisque) »、« si tost comme (= aussitôt que) »など「時」を示す従属節が同じ部類に入る。

Ex. 6) puis que vos le connoissiez, vos me poez bien dire
qui il est. (*ibid.*, 24, 14-5)⁹⁾
(あなたは彼をご存じなので、彼が誰であるのか私に教えて
下さることができるはずです。)

Ex. 7) si tost comme il sot que li rois estoit meüz (...), il se leva de
son lit. (*ibid.*, 8, 5-7)⁷⁾
(彼は、王が出立したと知るやいなや、寝床から立ち上がった、)

関係代名詞 « qui »も、その非限定用法の場合、一種の「従属節」を導き「並列型」

複文を構成する。

Ex. 8) Qui seüst, fet Lancelos, aucun recet pres del tornoiement ou nos
pouissons priveement estre, ge m'en tenisse a moult bien païé;

(*ibid.*, 71, 1-3)⁸⁾

〔誰か、とランスロは言う、騎馬試合の催される所の近くに我々がこっそり
身を寄せる隠れ屋を知っている者があれば、私は大変報われた気持ちにな
るのだが。〕

最後に、譲歩節が先行する複文もまた「並列型」である。

Ex. 9) qui que li chevaliers soit, il a moult bien commencié,

(*ibid.*, 19, 63-4)⁹⁾

〔その騎士が誰であれ、彼は大変立派に事を始めた、〕

一方、主節が倒置形式をなす「一文型」としては、◀ ainz que ▶に加えて◀ por ce que (= *parce que*, *pour que*) ▶ — フーレにもモアニェにもまったく言及されていないが — にこの特徴が認められる。

Ex. 10) et por ce que nos ne le veïsmes pieça ne ne savons se il
est a malese ou a ese, l'alons nos querant et l'avons quis
plus de uit jorz.

(*ibid.*, 44, 82-4)¹⁰⁾

〔我々は彼に久しく会っていないし、彼が病んでいるのか健やかなのか分
からないので、彼を捜しまわっているところでありしかも1週間以上捜
したところなのです。〕

『アーサー王の死』には他にも様々なタイプの複文が見出せるが¹¹⁾、ひとまず代
表的なものとして以上を挙げておくにとどめよう。簡単に振り返ると、古仏語の複文
二文型は複文のタイプによって使い分けられており、大部分の複文が「並列型」文型
を取る中で、例外的に◀ ainz que ▶ および◀ por ce que ▶に導かれる複文は「一文
型」文型を取っていることになる。これを、『アーサー王の死』が世に現れた時代、
すなわち13世紀初頭における複文二文型の使い分けモデルと見なして先を進めたい。

* * * * *

次に、このモデルを12世紀の言語状態に照らし合わせて見よう。12世紀、またはそ

れ以前の言語状態を探ろうとすると、依拠すべきテキストはもっぱら韻文に限られてくる。韻文は、散文においては影が薄れてしまっている特異な文法をしばしば垣間見せてくれる。ここでは、その特異性に重点を置き、上のモデルを別の角度から見直すことにしたい。

『アーサー王の死』のような散文作品では、動詞第二位が文を構成する原則であった。しかし、音節数を揃えたり、脚韻を合わせようとする、常に動詞第二位を守るのは容易ではない。韻文では、そのため、動詞第一位の文が現れることも少なくない。もちろん、表現上の理由から韻文作家が意図的に動詞第一位文を選択することもある。そのような場合、動詞が補語人称代名詞を伴い、しかも肯定文であると、古仏語特有の文法が適用される。下の例文12と例文13にそれが見られる。引用は12世紀末の武勲詞『オランジュ征服』¹²⁾ からで、いずれも文型は「V・S」である。

Ex. 12) *Vet s'en Guillelmes le marchis au vis fier*
(猛き顔のギヨーム伯は立ち去る) (*Prise d'Orange*, v. 397)

Ex. 13) *Ot le Guillelmes, si commença a rire:*
(ギヨームはそれを聞いて笑い始めた。) (*ibid.*, v. 630)

古仏語では、補語人称代名詞の非強勢形 — これに中性代名詞 « en », « i » も含まれる — が文頭に裸で晒されることを極度に嫌う性質があり、このように動詞第一位の文では後置される。

動詞と代名詞に関するこの古仏語独特の規則は、動詞第一位の文が選択された場合、たとえその前に従属節が位置していても守られる。その場合、補語代名詞の後置によって、従属節の後には明確な統辞的休止が打たれていることを感知し、問題の動詞部に改めて「文頭」を認めることができる。しかし、この現象は、従属節そのものが文頭として機能し動詞部が第二位を占めている形の「一文型」複文では起こりえない。従って、一つの従属節の後、直ちに動詞が来る場合、代名詞の位置 — それが動詞の前にあるか後ろにあるか — に着目することによって「並列型」かまたは「一文型」かを見定めることができることになる。まず補語代名詞後置例として次の三つの例文を見てみよう。やはり、『オランジュ征服』からの引用で、いずれも主語を欠いて動詞が主節第一位となったものである。

Ex. 11) *S'estiez ore el palés de la vile*
Et veïssiez cele gent sarrazine,
Connoistront vos a la boce et au rire, (*ibid.*, v. 336-8)
(もし今あなたが町の宮殿に入り、

そしてあのサラセンの者たちに出くわせば、
彼らはあなたの瘤と笑い方を見てあなたと見破るでしょう、)

- Ex. 12) Puis qu'ainsi est qu'a mort somes livrez,
Vendons nos bien tant com porrons durer! (*ibid.*, v. 840-1)
(かくのごとく死を避けられない以上
続かぎり我ら(の命)を高く売りつけてやろうぞ。)

- Ex. 13) Quant les noveles en savront voirement
Que assis somes ceanz si faitement,
Secorront nos bel et cortoisement, (*ibid.*, v. 1099-1101)
(彼らが報せを聞き、
我らがここでかくのごとく攻められていることを知れば、
しかと見事に我らを援けてくれよう、)

各複文を導いているのは、*« se »*、*« puis que »*として*« quant »*で、いずれも先に「並列型」複文を構成するものとして挙げたものばかりである。

『オランジュ征服』は、それに対して、*« ainz que »*節が主節に先行する例を二つ提供してくれるが、以下のようにいずれも代名詞は通常位置にあり、これが「一文型」であることをここでも示している。

- Ex. 17) Ainz qu'il l'eüst a ses amors atrete,
En ot por voir mainte paine sofferte, (*ibid.*, v. 36-7)
(己の想いに彼女を引きつける前に、
彼はまこと幾多の苦難を味わった、)

- Ex. 18) Ainz qu'eüssiez es granz portes l'entree,
I avroit il feru .M. cops d'espee, (*ibid.*, v. 312-3)
(あなたがたが大門の入口に辿り着く前に、
千もの剣のぶつかり合いが起こるでしょう、)

また、*« por ce que »*については、クレチアン・ド・トロワの『聖杯物語(ペルスヴァル)』¹³⁾(1185年頃)に下のような例が見出され、これが「一文型」であることが再確認される。

- Ex. 19) Por ce que vestir li feïst

li anvea ... (*Perceval*, v. 1601-2)
〔(その衣装を)着させるために
彼のところへ送ってよこした ...〕

Ex. 20) *Por ce que je sui pres que nue*
n' i panssai ge onques folie (*ibid.*, v. 1984-5)
〔私がほとんど裸だからといって
愚かなことを考えたわけではありません〕

この「*por ce que*」と「*ainz que*」の二つに関して例文11~13型の複文を見出すことは、12世紀以降のいかなる作品を見てもできないことをここで強調しておきたい。
『聖杯物語』にはまた、非限定用法の関係代名詞が導く複文に代名詞後置例が見出せる。

Ex. 21) *Qui boen escu, qui bone lance,*
qui bon hiaume et boene espee ot
presanta li, ... (*ibid.*, v. 4772-4)
〔良き楯、良き槍、
良き兜や良き剣を所持する者がいれば、
その者は(それらを)彼に差し出した、... 〕

蛇足ながら、「*Qui ... ot*」を、動詞「*presanta li*」の主語と見なさないよう注意を促したい。「*presanta li*」の補語代名詞後置形は、クレチアンが「*qui ...*」節を終えたあと、統辞的休止を挿み、続いて動詞第一位の主節を選択したことを示しており — 些細なことながら、この意を汲んで「*ot*」のあとにヴィルギユルが欲しいものである —、主節の主語が省略された「並列型」複文の一つにほかならないのである。同様の例が、1150年頃に書かれた『テーブ物語』¹⁴⁾でも見つかる。

Ex. 22) *Qui guerpira terre por lui,*
rendra la lui, (*Roman de Thèbes*, v. 1447-8)
〔彼(Pollinices 王)に加勢して領地を去る者、
その者に(王は)領地を(封土として)返して下されよう、

この場合、「*Qui guerpira terre por lui*」の内容は次行の「*lui*」で受けられており、主節の潜在的主語は別人物である。次の例も同じ『テーブ物語』から得られたものだが、ここでは「*qui ...*」のあと、それとは無縁の主語を備えた「S・V・C」

の主節が続いており、典型的な「並列型」複文となっている。

- Ex. 23) Qui m'en apportera le chié,
je l'en donnerai mout riche fié. (*ibid.*, v. 2601-2)
(その首を余のもとにもたらずであろう者、
余はその者にまこと豊かな恩賞を取らせるであろう。)

同じ『テーブ物語』では、さらに、「時」の接続詞« *des que (=dès que)* »で始まる複文に「並列型」が確認される。

- Ex. 24) Des que serons la a nostre ost,
assaudron les, prendron les tost. (*ibid.*, v. 2093-4)
(彼の地の我が軍に合流したい、
彼らを攻撃し、ただちに捕らえてしましましょう。)

- Ex. 25) des qu'el verra son filz em biere
que plus amoit que nule rien,
occirra moi, ce sai tres bien. (*ibid.*, v. 2440-2)
(柩に横たわる息子を彼女が目によればただちに、
その子をなによりも愛していたのだから、
(彼女は)間違いなく私を殺すであろう。)

ところで、« *puis que* »はこれまで同様『テーブ物語』でも「並列型」複文を導く接続詞であるが、1例だけ異なる事例がこの作品に見つかる。次の例文26は典型的な「並列型」¹⁵⁾、それに反して例文27(下線部)はその逆の「一文型」である。

- Ex. 26) Puis qu'il mesavint a ton pere,
tu feïs acorde a ton frere (*ibid.*, v. 1299-1300)
(父君を不幸が見舞ったのち、
あなたは弟君と和議を結ばれました)

- Ex. 27) Quant vostre terre iert confondue
et tant barons en seront mort,
a tart reconnoistras ton tort,
Puis que vendra au grant destroit
li rendrez vos trestout son droit;

vous li rendrez toute sa part,
mes ce sachiez, lores a tart. (*ibid.*, v.1378-84)

〔あなたの国が荒廢に晒され

あまたの武将が命を落としたときになって
過ちをお認めになっても遅すぎますぞ。

止むに止まれぬ窮地に陥ったあとになって

あなたは彼にそのすべての権利を返すことになりましょう。

彼に帰すべきものをすべて返すことになりましょう。

しかし御承知あれ、そのときには遅すぎますぞ。

見て分かるとおり、100行と隔たらないうちに作者は「並列型」と「一文型」を使い分けた結果となっている。それとも使い分けを誤ったと言うべきであろうか。もちろん、そうではない。要するに、一見「一文型」と見えるのは、疑問文ゆえの倒置形にほかならず¹⁶⁾、校訂者がつい見逃しただけに過ぎない。ここを疑問文と取る必要性は特にコンテキストから感じられない。また、疑問文と取ってコンテキストを歪めることもない。疑問文と見るべき必要に迫られなければ、まず肯定文として受容されるであろうことは理解に難くない。校訂者がこの文を肯定文として残しているのはそのためと思われる。しかしながら、このことは校訂者が結果的に複文二文型の使い分けを故意に無視したかあるいは知らなかったことを示しており、些細なこととはいえ、なおざりにはできない。

12世紀の韻文作品を幾つか見てきたところで、「一文型」複文と「並列型」複文の使い分けはここでもはっきりしており、散文『アーサー王の死』で確認されたものと基本的に変わりないことが分かる。資料数は充分なものとは言えないが、我々の知るかぎり12世紀以降この使い分けは一貫しているものと信ぜられる。

* * * * *

11世紀に遡って『アレクシス伝』と『ロランの歌』に目を転ずると、しかしながら、そのような一貫した使い分けはまだ出来上がっていないことが分かる。というよりも、11世紀では「並列型」複文の比重が一層高く、「一文型」はまだ未成熟であると言ったほうが正確である。

試みに『ロランの歌』¹⁷⁾から拾い上げると、従属節が先行する複文が全体で149例見つかり、そのうち< se >、< quant >で始まるものがそれぞれ51例、46例にのぼり、全体のおよそ3分の1ずつを占めるが、これほどの数の用例の中に「一文型」構造は1例も認められない。また、< cum (= *comme, quand*) > 12例、< puis que > 6例、その他12世紀以降も「並列型」を構成する類の接続詞は、『ロランの歌』でもす

べてそうである。

「並列型」の範疇に属すべきもので唯一問題箇所を挙げるとすれば、次の1点のみである。『ロランの歌』には、例の関係代名詞« qui »で始まる複文が16例現れ、これは« se », « quant »について三番目に頻度が高い。「qui」は、既に確認したように、「並列型」複文を導く。『ロランの歌』でも全16例のうち15例が動詞第二位の主節を有し、すべて「並列型」複文にほかならない¹⁸⁾。残る1例は、これもまたオリジナル写本（「オックスフォード写本」）に従えば動詞第二位主節からなる「並列型」構造と見てとれるのだが、いささか意味不明瞭なためJ・ベディエが修正を施し、それを踏襲したモアニェ版で次のようになっている。

Ex. 28) *Ki or ne voelt a mei venir s'en alt !*

(*Chanson de Roland*, v. 3340)

(余とともに来ることを望まぬ者は、立ち去るがよい。)

「オックスフォード写本」

Ki errer voelt a mei venir s'en alt.

(出陣を望む者は、余のもとに来るべく出立せよ(?))

場面はシャルル・マーニュが臣下を前に出陣を鼓舞しているところで、底本「オックスフォード写本」の読みは、確かに分かりにくい — しかしモアニェも指摘しているようにまったく不可能なものでもない¹⁹⁾ — が、4音節の前半句と6音節の後半句の間が従属節と主節の統辞的休止に一致し、形式としては極めてバランスの取れた姿をしている。それに対して、ベディエの修正（8音節+2音節）は、意味こそ通りやすくなっているものの、バランスが良いとは言えないばかりか、統辞的にも問題を差し挟む余地がある。というのも、「s'en alt (= s'en aille)»の前に従属節と主節の境目を置く結果となったため、4+6音節の原則を無視しているばかりか、もともと「並列型」を守っていた文を「一文型」に変えてしまっているからである（例文21及び22を参照）。他の15例がこぞって「並列型」である以上、オリジナルをそのまま残すか、あるいは修正を施すにしてもオリジナルの統辞枠に則った方法が取られるべきであろう。

ところで、『アレクシス伝』と『ロランの歌』において「一文型」複文はまだ未発達だと先に記した。まず« por ce que »であるが、これが主節に先行する例は『アレクシス伝』と『ロランの歌』を通じて次の1例しか見出せない。そして、その唯一の例の文型は、紛れもなく「並列型」であって、12世紀以降の使用（「一文型」）と異なる。

- Ex. 29) Li duze per, pur ço qu' il l' aiment tant,
Desfi les ci, sire, vostre veiant. (*Chanson de Roland*, v. 325-6)
〔12人将、これらは彼（ロラン）を愛する方々であるから、
私はここでこの方々にも挑戦する、王よ、あなたの眼前で。〕

これは« pur ço qu' »節の主語« il »を「トピック」として文頭（複数主格）で先取りした特殊な文型であるが、それはさておき、主節は補語代名詞を後置した動詞一位文で、従って全体は「並列型」複文にほかならない。

« ainz que »にも12世紀以降の使用と異なる実態が認められる。『ロランの歌』には« ainz que »が主節に先行するものが5例確認できるが、そのうちの1例のみは下のように「一文型」（補語代名詞前置）にとどまっている。

- Ex. 30) Einz que il moergent se vendrunt mult cher. (*ibid.*, v. 1690)
〔彼らは死ぬ前に自ら（の命）を高く売りつけることであろう。〕

しかし、次の例は動詞第1位文を主節とする「並列型」（補語代名詞後置）をなしており、

- Ex. 31) Einz que om alast un sul arpent de camp,
falt li le coer, si est chaeit avant. (*ibid.*, v. 2230-1)
〔戦場を1アルバンも歩かないうちに、
彼の心臓は止み、前に倒れた。〕

残り3例は下のごとく、例文32の主節は副詞« si »を介する動詞第二位文、例文33のそれも「S・V」のやはり動詞第二位文で、いずれも「並列型」であり、最後の例文34は拙訳の文節通りだと動詞第三位文となるが同じく「並列型」の一つと処してよいだろう。

- Ex. 32) Einz qu' il otssent .IIII. liues siglet,
Sis aquillit e tempeste e ored. (*ibid.*, v. 688-9)
〔4里も航行しないうちに、
彼らを嵐と雷が出迎えた。〕

- Ex. 33) Ainz que Rollant se seit aperceüt,
De pasmeisuns guariz ne revenuz,
Mult grant damage li est apareüt: (*ibid.*, v. 2035-7)

〔ロランが気を取り戻し
失神から癒え、立ち直る前に、
大変大きな不幸が彼に立ち現れた、〕

- Ex. 34) Einz que jo vienge as maistres porz de Sirie,
L'anme del cors *me seit oi departie*, (*ibid.*, v. 2939-40)
〔スイリーの大狭間に着く前に、
今日、私の魂が体から引き離されますように、〕

『アレクシス伝』では« *ainz que* »が2例、しかも連続して一箇所で見られているが、写本間にかかなりの異同が見られ、オリジナルの正確な姿は分からない。しかしながら、その写本間のずれを通しつつここでも『ロランの歌』に似かよった状況を想定することができる。以下は代表的写本²⁰⁾の該当箇所(校訂本の456-7行)で、場面はアレクシスの屍を前に母親が嘆いているところである。分かりやすいよう、主節の文頭部に下線を付した。

- Ex. 35) 「L写本」(1150年頃)

Ainz que tei vedisse fui mult desirruse,
ainz que ned fusses sin fui mult angussuse
〔お前を目にする前、とても待ち望んだものでした、
お前が生まれる前、それはとても辛い思いをしたものでした〕

- 「A写本」(12世紀)

Ainz que tei ousse tant en fui desiruse
ainz que fus nez en fui mult angussuse

- 「P写本」(13世紀)

Ains que te eusse fui mult desirose
ains que te veisse mult par fui angoissose

3写本2行ずつの合計6行の主節を見比べると、「一文型」と認められるのが「A写本」第一行のみであるのに対し、「並列型」は「L写本」第二行、「A写本」第一行そして「P写本」第二行の計三箇所を確認される(残る二箇所は判断の基準を持たない)。つまり、3対1の割合で「並列型」が「一文型」を凌いでいることとなり、オリジナルを想定するのにこの数字を拠り所としないわけにはいかないであろう。上の3写本のうち「L写本」が最も古く貴重なものとされ、従って通常『アレクシス伝』

の底本に採用されるのはこの写本であるが、5 + 5 音節の第一行は 4 + 6 音節の原則に照らすと修正の対象となる。その場合、文型として「並列型」か「一文型」か選択するとすれば、当然「一文型」を避け「並列型」を採用すべきことになる²¹⁾。

このように、『アレクシス伝』と『ロランの歌』で確認可能な「一文型」複文は、*« ainz que »*に導かれる複文に限られ、しかも確実なものは『ロランの歌』の5例中1例に過ぎない²²⁾。特に『ロランの歌』において*« por ce que »*の唯一例が「並列型」であり、また*« ainz que »*の5例中4例までが「並列型」である事実に注目すれば、この二つによって作られる複文も本来は「並列型」に過ぎず、いまして遡れば複文をなすのには万事併置で事足りる古い言語形態に辿り着くものと思われる。

* * * * *

以上、古仏語の複文の二文型を巡って13世紀初頭の散文『アーサー王の死』から出発し、12世紀の韻文作品を経て、11世紀の『ロランの歌』、『アレクシス伝』と辿ってきたが、振り返ってまとめたい。

そもそもフランス語において、複文は文と文を併置するだけで成立する。二つの文の従属関係は、今日我々が従属接続詞と呼ぶものを二つの文のいずれかに冠するだけで保証されるのである。ところが、動詞第二位の原則の定着にともない古仏語のある時期に、従属節が、文頭として意識されることによって、主節の語順を規定する現象が出てくる。その確実な例は、本稿の範囲では、『ロランの歌』が最初であるが、それもまだ例外的なものにとどまっている。この現象は、その後急速に発達したものと思われ、12世紀初めには定着し、原則化している。しかし、この新しい原則に従うのは*« ainz que »*、*« por ce que »*の特定の接続詞で始まる複文に限られ、その他大部分の接続詞 — *« se »*、*« quant »*、*« cum »*、*« puis que »*、*« des que »* etc.、そして*« qui »* — が構成する複文は、この新しい潮流とは無縁のまま従来の原則を維持し続ける。

そこで出てくるのが、この新しい複文形式が*« ainz que »*、*« por ce que »*に関してのみ根を下ろしたのは何故かという疑問であるが、これに対する答えは明確には引き出しがたい。仮に、*« ainz que »*節や*« por ce que »*節が主節に倒置を招く問題に限れば、単文において*« ainz »*や*« por ce »*そのものが倒置を呼ぶものであることを引き合いに出し、類推あるいは拡張と説明すれば簡単に片づくし、またそうする以外に説明方法はない。しかしながら、*« puis »*や*« des »*についても同じ説明を繰り返すことが可能である以上、*« puis que »*や*« des que »*が導く従属節のあとに倒置が起きたところで不思議はないのに実際はそうではない。

おおよそ本稿で言えることは次のようなことであろう。まず、*« se »*と*« quant »*は、直接・間接の疑問文を導く以外、従属接続詞としての使い方しかない。従って、

これらは上のような拡張または類推の関係とは無縁である。加えて、この二つは、他に抜きんでて使用頻度が高く — 例えば『ロランの歌』では、この二つの用例を合わせると全用例の3分の2を占める — 、それだけ言語に深く根ざしたものとと言える。他から影響を被るよりもむしろ他を呑み込む影響力をそこに認めることができよう。ところで、従属節が主節に先行する場合、「時」を表す接続詞は、◀ ainz que ▶を例外としてすべて、主節に対して時間的に前提となる事柄を導入する。◀ ainz que ▶のみは、主節に先行すると従属節と主節との時間関係は逆行的である。◀ por ce que ▶は、「原因・理由」を表すときは前提と言えるが、「目的」を表すときはそうと云えない。いずれにしろ、これは「時」とは別の範疇に属する。「条件」を導く◀ se ▶は、「帰結部」の主節と「前提部」の関係にある。また、◀ se ▶の用法は◀ quant ▶の用法と重なることがあり、両者の意味領域の境界は曖昧である。さらに◀ qui ▶によって導入される内容もまた、主節の前提であることに変わりはない。しかも◀ qui ▶は、これを訳すときしばしば◀ si l'on ..., si quelqu'un ... ▶と言い換えられるように、◀ se ▶の用法からそれほど遠くない。このように共通項を追っていくと、様々な接続詞のうち◀ ainz que ▶と◀ por ce que ▶が新しい倒置要因に変わっていった中で、この新しい潮流と無縁のものはすべて広い類縁関係の中にあると捉えることができる。しかも、この類縁関係で結ばれる接続詞群の要となるのが、ほかならぬ先程言語に深く根ざしたものと表現した◀ se ▶と◀ quant ▶なのである。

注

- 1) Lucien FOULET, *Petite syntaxe de l'ancien français*, 3ème édition revue, Honoré Champion, C.F.M.A., Paris, 1980, p. 312.
- 2) Gérard MOIGNET, *Grammaire de l'ancien français*, 2ème édition revue et corrigée, 2ème tirage, Klincksieck, Paris, 1979, p. 358.
- 3) Jean FRAPPIER (éd.), *La Mort le roi Artu*, 3ème édition, Droz, Genève / M. J. Minard, Paris, 1964.
- 4) 否定の« ne »及び補語人称代名詞非強勢形は「動詞部分」に含まれる。
- 5) « se »は« quant »に並んで「並列型」複文を構成する代表的接続詞である。加えて二つとも他に抜き込んで用例が多い。従って、同例を引用する必要はないであろう。ただし、以下のように倒置型主節を招く例を指摘しておきたい。

se vos estiez en la meilleur cité que vos aiez, ne seriez vos mie
mielz serviz ne mieuz aiesiez que vos seroiz ceanz; (50, 47-9)

これは今のところ« se »節のあとに否定文の主節が続いた場合にのみ起こる現象のようであり（ほかに、41, 53-7; 146, 48-9; *Roman de Thèbes*, 6559-60; 7421-2; 7549-52 etc. に同例）、異なる問題として別の機会に再考すべきものと思われる。

- 6) 同様に、11, 25-6; 24, 17-9; 36, 48-50; 41, 35-7; 45, 53-5; 50, 66-8; etc.
- 7) 同様に、21, 6-8; 48, 56-8; 52, 44-6; 57, 15-7; 58, 12-4; -, 14-7; etc.
- 8) 同様に、60, 33-4; 104, 9-11; 111, 26-7; etc.
- 9) 同様に、77, 38-9; 105, 13-4; 110, 35-6; 130, 10-2; etc.
ただし、« por chose que » (111, 27-9) はこの限りではない。
- 10) 同様に、70, 11-3; 71, 10-5; 104, 67-71; 106, 12-6; 118, 25-8; etc.
ただし、この« por ce que »の場合、稀に上述の« si »で始まる主節が続くことがある。

por ce que ge n'avoie pas esté a l'autre, si volsisse trop
volentiers estre a ceste. (*ibid.*, 65, 34-5 ;同様に、138, 7-10)

この限りでは、« por ce que »節のあと、新たな文頭支えを必要としていることになる。しかしながら、主節が「S・V・C」のような整った文となる例は見られないので、« por ce que »も一応「一文型」に分類して差し障りはないものと見なせる。

- 11) 因みに「一文型」例として« la ou » (44, 23-7)、« tout ensi comme » (53, 17-8)、「並列型」として« endementres que » (71, 1-4; -, 47-50)、「a ce que » (75, 30-2)、「en ce que » (88, 1-3; 99, 8-11; 100, 15-8)などがある。
- 12) Claude REGNIER (éd.), *La Prise d'Orange*, 5ème édition, Klincksieck, Paris, 1977.

- 13) Félix LECOY (éd.), *Le Conte du Graal (Perceval)*, Honoré Champion, C.F.M.A., Paris, 1981.
- 14) Guy RAYNAUD DE LAGE (éd.), *Le Roman de Thèbes*, Honoré Champion, C.F.M.A., Paris, 1969.
- 15) 同様に, v. 1755-6; 2871-3; 5259-60; 5321-2; 5911-2; 5983-4; etc.
- 16) いずれにしても、文頭の補語代名詞は避けられるべきであるが、疑問文では補語代名詞が動詞の前に立つことが容認されている。

Diz me tu verité? (*Prise d'Orange*, v. 766)

Te tindrent onques Sarrazin en prison? (*ibid.*, v. 216; v. 528)

Sire Guillelmes, vos plect il nule rien? (*Charroi de Nîmes*, v. 726)

- 17) Gérard MOIGNET (éd.), *La Chanson de Roland*, Bordas, Paris, 1985.
- 18) v. 353-4; 596-7; 1105; 1181-2; 1418; 1970-2; 2109; 2494; 2523; 2584; 2935; 3271-2; 3483-8; 3840; 3959.
- 19) *Ki or ne voelt...*: correction de J. Bédier; le ms. comporte: *Ki errer voelt*, difficile à interpréter; on pourrait entendre: « qui veut marcher, qu'il aille pour venir à moi ». *Soi en aler* signifie « se mettre en route », sans impliquer nécessairement l'idée d'éloignement. (*ibid.*, p. 236)
- 20) 引用は、FOERSTER / KOSCHWITZ, *Altfranzoesisches Uebungsbuch*, erster Teil, Leipzig, 1902 から。
- 21) 実際、G・パリスがL・パニエと1872年に世に出した『アレクシス伝』において問題の2行はいずれも「並列型」として処理されている。

Ainz que t'ousse si'n fui molt desirrose;

Ainz que nez fusses si'n fui molt anguissouse;

(G. PARIS et L. PANNIER, *La Vie de Saint Alexis*, Paris, 1872,

Slatkine Reprints, 1974)

ところが、その後G・パリスは大学の授業用として独自のエディションを出版するが(1885年、ついで1903年に改訂版)、その新しいエディションにおいて問題の2行は「一文型」と「並列型」が相並ぶという不可解な姿に変わっている。

Ainz que t'ouisse en fui molt desidrouse;

Ainz que nez fusses sin fui molt angossouse;

(G. PARIS, *La Vie de Saint Alexis*, Honoré Champion, C.F.M.A., Paris, 1980)

因みに、比較的最近のG. ROHLFS版(Max Niemeyer, 1968)、C. STOREY版(Droz, 1968)では2行とも「並列型」である。

- 22) 実際には、『ロランの歌』にあと1例の「一文型」複文が存在する。下の« *quant que* »の例がそれであるが、本稿は比較的目に止まりやすい接続詞に焦点を絞ってきたため検討の対象外となった。いずれ改めて網羅的調査を行いたい。

(...), *quant' il poet s'esvertuet;*

(v. 2298)